

# 尾生の信

芥川龍之介

青空文庫



尾生は橋の下に佇んで、さつきから女の来るのを待っている。  
 見上げると、高い石の橋欄には、蔦蘿が半ば這いかか  
 つて、時々その間を通りすぎる往来の人の白衣の裾が、鮮かな入  
 日に照らされながら、悠々と風に吹かれて行く。が、女は未だに  
 来ない。

尾生はそつと口笛を鳴しながら、気軽く橋の下の洲を見渡した。  
 橋の下の黄泥の洲は、二坪ばかりの広さを剩して、すぐに水  
 と続いている。水際の蘆の間には、大方蟹の棲家であろう、  
 いくつも円い穴があつて、そこへ波が当る度に、たぶりと云うか  
 すかな音が聞えた。が、女は未だに来ない。

尾生はやや待遠しそうに水際まで歩ほを移して、舟いっそう一艘通らな  
い静な川筋を眺めまわした。

川筋には青い蘆あしが、隙間すきまもなくひしひしと生えている。のみな  
らずその蘆の間には、所々ところどころに川楊かわやなぎが、こんもりと円く茂  
っている。だからその間を縫う水の面おもても、川幅の割には広く見え  
ない。ただ、帯おびほどの澄んだ水が、雲母きりらのような雲の影をたつた  
一つ鍍金めっきしながら、ひっそりと蘆の中にうねっている。が、女は  
未だに来ない。

尾生は水際から歩をめぐらせて、今度は広くもない洲すの上を、  
あちらこちらと歩きながら、おもむろに暮色を加えて行く、あた  
りの静かさに耳を傾けた。

橋の上にはしばらくの間、行人こうじんの跡を絶つたのであろう。沓くつの音も、蹄ひづめの音も、あるいはまた車の音も、そこからはもう聞えて来ない。風の音、蘆の音、水の音、——それからどこかでけたましく、蒼鷺あおさぎの啼く声が出た。と思つて立止ると、いつか潮がさし出したと見えて、黄泥こうでいを洗う水の色が、さつきよりは間近に光っている。が、女は未だに来ない。

尾生は険しく眉まゆをひそめながら、橋の下のうす暗い洲を、いよいよ足早に歩き始めた。その内に川の水は、一寸ずつ、一尺ずつ、次第に洲の上へ上つて来る。同時にまた川から立昇たちのぼる藻もの勻おいや水の勻も、冷たく肌にまつわり出した。見上げると、もう橋の上には鮮かな入日の光が消えて、ただ、石の橋きょうらん欄らんばかりが、ほ

のかに青んだ暮<sup>くれ</sup>方の空を、黒々と正しく切り抜いている。が、女は未だに來ない。

尾生はどうとう立ちすくんだ。

川の水はもう沓を濡しながら、鋼鉄よりも冷やかな光を湛<sup>た</sup>えて、漫々と橋の下に広がっている。すると、膝<sup>ひざ</sup>も、腹も、胸も、恐らくは頃<sup>けい</sup>刻<sup>こく</sup>を出ない内に、この酷<sup>こく</sup>薄<sup>はく</sup>な満潮の水に隠されてしまふのに相違あるまい。いや、そう云う内にも水<sup>みづ</sup>嵩<sup>かさ</sup>は益<sup>ます</sup>高<sup>ます</sup>くなつて、今ではどうとう両<sup>りょう</sup>脛<sup>はざ</sup>さえも、川波の下に没してしまった。が、女は未だに來ない。

尾生は水の中に立つたまま、まだ一縷<sup>いちる</sup>の望を便りに、何度も橋の空へ眼をやつた。

腹を浸ひたした水の上には、とうに蒼茫そうぼうたる暮色が立ち罩こめて、  
 遠おちこち近ちかに茂った蘆や柳も、寂しい葉ずれの音ばかりを、ぼんやり  
 した靄もやの中から送つて来る。と、尾生の鼻を掠かすめて、鱸すずきらしい魚  
 が一匹、ひらりと白い腹を翻ひるがえした。その魚の躍つた空にも、疎まぼらな  
 がらもう星の光が見えて、蔦つた蘿かざらのからんだ橋きょう欄らんの形さえ、  
 いち早い宵暗の中に紛まぎれている。が、女は未だに來ない。……

夜半、月の光が一いっせん川の蘆と柳とに溢あふれた時、川の水と微風と

は静に囁き交しながら、橋の下の尾生の死骸を、やさしく海の方へ運んで行つた。が、尾生の魂は、寂しい天心の月の光に、思い憧れたせいかも知れない。ひそかに死骸を抜け出すと、ほのかに明るんだ空の向うへ、まるで水の匀や藻の匀が音もなく川から立ち昇るように、うらうらと高く昇つてしまった。……

それから幾千年かを隔てた後、この魂は無数の流転を閲して、また生を人間に託さなければならなくなつた。それがこう云う私に宿っている魂なのである。だから私は現代に生れはしたが、何一つ意味のある仕事が出来ない。昼も夜も漫然と夢みがちな生活を送りながら、ただ、何か来るべき不可思議なものばかりを待っている。ちようどあの尾生が薄暮の橋の下で、永久に来ない恋

人をいつまでも待ち暮したように。

（大正八年十二月）



# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月8日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 尾生の信

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>